



三谷 華穂 (みたにかほ) 由井第一小 6年生

作品名：雪渡り

図 書：雪渡り

この本では、きつね小学校の幻燈会に四郎とかん子が子ぎつねの紺三郎に招待されて、きつねたちとコミュニケーションをとりながら仲良くなっていくストーリーです。この本を読んで、私は一度だけで良いのでこの楽園のような世界に行ってみたくて思いました。なぜなら、きつねたちのルールという中に、うそをつかない。自分に正直であると述べているからです。

私が幼稚園生だったころ、コミュニケーションを取ることは苦手でうそをつくのが得意でした。友達と話すときには必ずうそをついてそのうそを支えるためにまたうそをつきました。一度だけ全部うそと話したことがありましたが、そのときはとてもはっきりと大嫌いと言われてしまいました。それから、うそをうそと言うことが怖くなって本当のことを言わずにほったらかしにしていました。そうしているうちに、後戻りができなくなってしまいました。心の中ではちゃんとと言えるのになぜ言葉にできなかったのだろうとずっとくやんでいました。うそを言うごとに積み重なるうそで自分がうまっていくようでした。このことを泣きながら祖母に話してみると、「それはいけないね、ちゃんとお友達に話してごらん、きっと分かってくれるはずだから。」と私の背中をやさしく押してくれました。祖母の言葉を信じて友達に今までのことをおびえながらも話してみると、びっくりするほどあっさりとゆるしてくれました。けれど、だれかの力にたよってゆるしてもらったことは、まちがいないと思えました。だから、きつねたちのルールの中にあつたようにうそをつかず、自分に正直でありたいと思えました。そして、友達の信らいを取りもどせた幸せは、きつねの子供たちが四郎とかんこに信らいされたときの場面ともものすごく似ていると思えました。

このことから、あらためて、うそを自分のためにつかないようにしたいと思えました。そのために今後、もっと正直でいられる六年生に私はなりたいと思った。